木村政雄編集長

*Special Interview*

# 都はるみ

昭和23年、京都市生まれ。昭和39年、16歳のとき『困るのことョ』でデビュー。同年、『アンコ椿は恋の花』で日本レコード大賞・新人賞受賞。昭和51年、『北の宿から』で同大賞受賞。昭和59年、引退。昭和62年、音楽プロデューサー活動開始。平成2年、歌手復帰。9月7日に通算127曲目となる歌人の道浦母都子作詞による話題のニューシングル『枯木灘残照』を発売。

## ふたたび輝いて

**『北の宿から』『大阪しぐれ』、誰もが口ずさむ大ヒットを次々飛ばしてきた都はるみさんが突然引退したのが36歳。5年半後に復帰するが、この間に見た世界は何もかもが新鮮だったという。いま、ふたたび輝きを増している彼女に、決断の時の気持、最近の仕事に対する思いなどをうかがった。**

**木村**　都はるみさんは昭和23年に京都のお生まれですね。ぼくも21年の京都生まれで年齢も近くてとても親近感を感じていたのですが、これまでなぜかお会いする機会がありませんでした。ですから今回、『51』の第1回インタビューをするにあたっては、どうしても都さんにお願いしたかったのです。都さんは36歳の「人生いちばんの華」という時に引退宣言されましたよね。ぼくも衝撃を受けた一人なんですよ。その時の思いをおうかがいしたいのですが。なぜ辞めようと思われたのですか？

**都**　16歳でデビューして以来20年間ずっと働きつづけてきたでしょう。せっかく女性に生まれて来たのに、母が敷いたレールを忠実に歩んで来たままでいいのかな？　って、だんだんと思えてきたんです。だんなさんがいて、子供がいて、温かい家庭がある。それを自分も望んでいいのかな、と思うようになったんです。40歳になる前に「惜しいな、何で辞めるの？」と思われる時だからこそ、女としての人生に賭けたかったんですね。

——周りにはたいへんな抵抗があったのでは？　レコード会社とかプロダクションとか……だってドル箱のスターですもんね。

**都**　「40歳じゃだめなの？」と言われたけれど、いまを逃したらもう賭けられない。「どうしても！」そう思える瞬間が大事だと思えて自分の気持を貫いたわけですね。

——それで自らの意志をとおして辞められた。幸せになれましたか？

**都**　2年半の間に子供を産むことについては、諦めたんですけどね……。引退する年の昭和59年に作家の中上健次さんと対談でお会いしたのがきっかけで、パリだとか新宮だとか、年中いっしょに行かせていただきました。作詞家や作曲家の方たちとも、いつもあちこちに出かけて行きました。本当に楽しかったんです。歌を歌ったらすぐ帰る今までの旅とは違って、自然な旅のなかで海や山や風景を見

られたのはとっても新鮮でしたし、今でも大切な財産になったと思っています。

——引退されて2年半後、プロデュースの活動を始められましたね？　歌への欲がまた出てきたということですか？

**都**　いいえ、「歌いたい」という気持にはならなかったですね。でも、日本全国を自分の足で回り、17歳の大和さくらという女の子と出会って半年間、母が私に教えてくれたように、自分が歌いながら一生懸命に歌を教えた。お金にはならないけれど、とてもやりがいのある仕事でしたから、すごく楽しかったです。一生懸命やってましたから。

☒☒☒☒☒☒☒☒☒☒☒☒

——ご自分がふたたびステージに立つ気持はいつ出てこられたんですか？

**都**　辞めてちょうど4年半ごろ平成になった時です。昭和をふり返るというテーマでしたが、「デビューした昭和39年当時の思い出を、紅白歌合戦のなかで語ってくれませんか」とNHKのプロデューサーの方に言われたんです。でも、16歳の子供の頃でしょう、東京オリンピックとか新幹線開通ぐらいしか思い出なんてないんですね。「じゃ、歌っちゃおうかなぁ」なんって、つい軽く口にしてしまったんです。

——その時は何を歌われた？

**都**　その時、『アンコ椿は恋の花』を歌いました。紅白歌合戦では初めて歌った歌なんで

すね。年が明けて、歌手を辞めた素人がなんで歌っちゃったのかな……ってずいぶん悩みました。そんな時、NHK教育テレビのシャンソン特集でエディット・ピアフさんが歌っているのを見たんです。ピアフさんは「私はピアフよッ！」とでもいうふうに、自分のスタイルで歌っていたんです。その姿に感動しました。すごいな、と打たれましたね。それでいままで見ることができずにいた、『アンコ椿は恋の花』を歌っている自分のビデオを見ることができました。あの瞬間あの場所に歌手でもない私がいたのは、やっぱり、「かつて自分も都はるみという歌手だった」という思いをぶつけていたんですね。それで心に答えが出たんです。

――なるほど、そうだったんですか。とってもいいお話ですね。

**都**　結局、辞める時も、もう一度始める時も、ぜんぶ自分で決めてるんです。肩に力を入れないで自分で自分をプロデュースできるかもしれないと思うようになれたことで、それなら復帰しようと決めた。これからは、商品である自分が楽しく面白く歌えるように自分でしていこうと。そしたら「歌います」となっていました。私って、すごく単純な人間なんですね。

## やはり、いつも闘いなんです

――あえてリスクを前倒しする道を選ばれたわけですが、その結果、都さんは素晴らしく魅力的な50代になられましたね。自分の言葉、自分の人生観をしっかり持っていられますものね。それはやはり5年半の蓄積が大きかったと思いますね。ぼくも56歳で会社を辞めましたが、辞めてよかったと思っています。都さんのような先輩がいるんですから、みんなどんどん辞めたらいい。ところで、辞める前と復帰後のステージの違いはいかがですか？

**都**　それは全然違いますね。辞める前は、辞めたい願望ばかり。でも、早く辞めると次のステージへ行けるということですよね。今は、ステージが楽しくてしょうがないんです。もちろん、反面苦しさもあるんですけれどね。孤独感も味わえるし。居心地がいいなんて前はあまり感じられなかったんですけど。この年で今がいいなんて思えるのは、やはり母のおかげだと思いますね。

――日々、楽しいことをやられているから、ストレスなんかたまらないでしょう？

**都**　ストレスはありますよ。たとえば、同じ『大阪しぐれ』を歌っていても、うまく歌える時と歌えない時がある。毎日違うんです。やはり、いつも闘いなんですね。だから飽きないんですね。

――これで完成なんてないんですね。ところで、今度、新曲を出されますね。

**都**　ええ、『枯木灘　残照』という歌です。歌人の道浦母都子さんの短歌をお借りして、雄大なアレンジなんですが、メロディーはやさしいですから、ぜひ、みなさんも歌ってほしいです。

――最後に、都さんと同世代の本誌の読者にエールを贈って頂けるとしたら、どんな言葉でしょうか？

**都**　過去はふりかえらない。今日がすべて、「今日はよかったな」、そう思えたら、それでいいのではないでしょか？

――今日は、本当にいいお話を、ありがとうございました。

**後記**

「自分をプロデュースする」それは何もタレントさんに限ったことではない。主体的な意思をもって生きるということである。だからこそ都はるみさんは、今も瑞々しいし、凛（りん）としたたたずまいを失わない「いい女」でいることができているのだと思う。我々男どももそんな生き方をしてみたいものである。（木村）

撮影／長谷川朝美